



# 2017年度日本語教育学会支部集会予稿集

【九州・沖縄支部】 2017(平成29)年6月10日・11日／大分大学

## 2017 年度第 1 回支部集会【九州・沖縄支部】

### 「やる気を引き出す」学びの交流会 in 大分

2017 年 6 月 10 日(土)・11 日(日)

大分大学 旦野原キャンパス

主催:公益社団法人日本語教育学会 協賛:国立大学法人大分大学

会場: 〒870-1192 大分市大字旦野原 700 番地 大分大学 旦野原キャンパス 教養教育棟

交通アクセス: <http://www.oita-u.ac.jp/category/access.html>

参加費(資料代): 1,500 円

#### 第2日目 11日(日)

### 研究発表(ポスター発表)【12:50-14:20/教養教育棟 2階 24号】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。

- ① コーパスによる日本語能力試験2級の文法項目の再検討……………2  
鋤野亜弓(福岡女子大学大学院生)
- ② 意見文における因果関係の表し方—「理由先行型」か「結果先行型」か—……………8  
美玲(福岡女子大学大学院生)
- ③ スマートフォンを活用した活動型学習の可能性  
—街歩きクイズラリーを通じた交流の一考察—……………14  
高尾まり子・寺嶋弘道・戸坂弥寿美・井上佳子(立命館アジア太平洋大学)



## コーパスによる日本語能力試験 2 級の文法項目の再検討

鋤野 亜弓（福岡女子大学大学院生）

### 1. はじめに

本発表では『日本語能力試験 出題基準（改訂版）』（2002）の「2 級の文法的な〈機能語〉の類（サンプル）」にある項目の使用頻度を場面ごとに調査した。場面は学習者が実際に使用する必要がある「産出」と、聞いたり、読んだりしてわかる「理解」、更に「話す」「聞く」場合の「音声言語」と「書く」「読む」場合の「文字言語」に分け、「産出・音声」「産出・文字」「理解・音声」「理解・文字」と大きく 4 つに分類した。その上で学習者が遭遇する場面を想定し、コーパスを用いて調査を行った。

各コーパスの出現頻度上位の文法項目を比較し、その結果、場面ごとによく用いられている項目、ほとんど使用されていない項目、全く使用されていない項目が明らかとなった。実用的な運用の能力を高めるためには、使用場面を明らかにしつつ、どの項目が用いられるのか、またどの項目が用いられにくいのかを教師側があらかじめ知っておけば、教える際にもかなり役立つだろう。

### 2. 調査の目的

2015 年現在 68 の国や地域で実施、受験人口も 65 万人を超えている日本語能力試験（以下、「能力試験」）は 2010 年に「実用的な言語運用能力を測る試験」へと改定された。しかし、出題方法は変わっても学習した項目を、いつ、どの場面で使うのかわからない学習者、どうしたら産出に繋がるかと悩む現場の日本語教師は多く「実用的」とは言えない。庵（2006）では、『日本語能力試験 出題基準 改訂版』（以下「出題基準」）の特に文法に関して、文法項目を「産出」することよりも「理解」することが先行しているため 1 級合格者でも日本語で正確に話すことができなかつたり、理解レベル止まりで、産出レベルには至らないものを話したりする学習者がいるなど、「産出」と「理解」の混同が原因で起こる問題が多く見られることが指摘されている。本発表では同じ問題意識の下、文法項目の中でも日本企業就職や進学に有利とされる 2 級レベルを調査対象とし、学習者の理解度、産出度を上げるとともに、現場の教師にも使いやすい教材の糧となるよう能力試験の出題基準の項目を再検討した。なお、出題項目は新しい能力試験になってもほとんど変わらないため、本発表では旧日本語能力試験の出題基準を使用する。

### 3. 調査方法

本発表では出題基準の「2 級の文法的な〈機能語〉の類（サンプル）」にあげられている項目を場面ごとにコーパスを用いて使用頻度調査を行う。使用頻度調査として使用したコーパスはすべて日本語母語話者によるものである。



使用場面は日本に滞在し、日本語学校などで大学や専門学校への進学を目標としている学習者が実際に遭遇する場面を想定して分類した。使用場面を図式化したのが下の図 1 である。「産出」は学習者が話したり、書いたりして言語を産出する場面、「理解」は産出するよりも見たり、聞いたりすればよい場面を想定している。

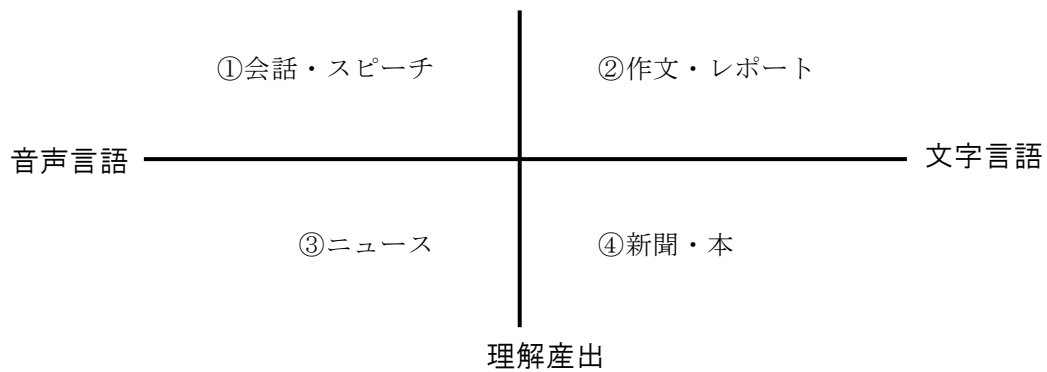


図 1 場面の分類

表 1 調査に用いたコーパス

①会話・スピーチ 【産出・音声言語】	②作文・レポート 【産出・文字言語】
<ul style="list-style-type: none"> <li>『インタビュー形式による日本語会話データベース』（北九州市立大学）</li> <li>『合本 女性のことば・男性のことば（職場編）』の男女の雑談のみ（現代日本語研究会）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』（横浜国立大学）</li> <li>『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース』（国立国語研究所）</li> </ul>
③ニュース 【理解・音声言語】	④本、新聞 【理解・文字言語】
<ul style="list-style-type: none"> <li>NHK NEWS WEB の「社会」「スポーツ」「気象・災害」（2016 年 8 月発表者作製）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の 2000 年代（2001 年～2008 年）の朝日新聞、毎日新聞（国立国語研究所）</li> <li>『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の 1990 年代（1990～1999 年）、2000 年代（2001 年～2008 年）の文学のベストセラー</li> </ul>

※各コーパスの名称については、本稿では以下のとおり略称を用いる。

『インタビュー形式による日本語会話データベース』：北九大

『合本 女性のことば・男性のことば（職場編）』雑談：職場編・雑談 男性／職場編・雑談 女性

『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』：横浜国大

『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース』：国研対訳

NHK NEWS WEB の「社会」「気象・災害」「スポーツ」：NHK 社会／NHK スポーツ／NHK 気象災害

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』：BCCWJ 新聞／BCCWJ 文学



4. 調査結果

表 2 各コーパスにおける出現頻度の高い文法項目

	文法項目	産出・音声		産出・文字		理解・音声			理解・文字	
		北九大	職場編・雑談	横浜国大	国研対訳	社会	スポーツ	気象災害	BCWJ 新聞	BCWJ 文学
上位 5 %	～について/～については/～についても/～についての	○	○3	○	○	○		○4	○	○
	～として/～としては	○	○	○	○3	○2	○	○4	○	
	～に対して/～に対し/～に対しては/～に対しても/～に対する	○4			○4	○	○2		○	○3
	～によると/～よれば					○	○2	○	○4	
	～によって/～により/～による(原因)			○2	○3	○4	○	○3		○3
	～ように(類似)	○4	○2	○4	○				○3	○3
	～上で～上でも/～上での					○				
	～べき/～べきだ/～べきではない			○4	○				○4	○3
	～など/～なんか/～なんて		○	○2						○
	～とともに					○3	○			
	～にとって			○3	○					○3
	～から～にかけて			○2				○		
～つけ		○								
～もの		○								
上位 4 %	～おそれがある							○		
	～ということだ(つまり)	○								
	～こそ	○			○2					○3
	～ように(目的)	○			○2					
～ものだから	○									
上位 3 %	～際/～際に/～際には					○				
	～ことから					○	○2	○2		
	～を中心に/～を中心として/～を中心にして							○		
	～とおりに/～とおりに/～どおり/ ～どおりに									○
	～上で/～上でも/～上での						○			
上位 2 %	～一方/～一方で/～一方では							○	○	
	～だけ	○								
	～に関して/～に関しては/～に関しても/～に関する	○	○	○						
	～によって/～により/～によっては/～による	○		○	○					
	～向けだ/～向けに/～向けの			○						
	～たところ			○						
	～わけだ				○					
	～以上/～以上は				○					
	～からといって				○					
	～としても				○					
	～上/～上は/～上も								○	
	～ほどだ/～ほど/～ほどの									○
～うちに/～ないうちに									○	
～として									○	
～さえ									○	



表 2 は、横軸が使用場面および使用したコーパスを表し、縦軸が各コーパスでの出現頻度の高い文法項目を表している。今回、上位 5% 以上だけではなく、上位 4% 以上 5% 未満、上位 3% 以上 4% 未満、上位 2% 以上 3% 未満と段階的に分類した。これは今後教えるにあたって、上位 5% 以上は必須、あとは学習者のレベルに合わせて段階的に指導できるようにするためである。上位 5% 以上の表にある「○」は使用率が 5% 以上であることを、「○3」などは 3% 台に出てきたものであるということを意味している。全 180<sup>1</sup>項目中、上位 2% 以上に見られたのは全部で 39 項目であった。また、出題基準では、意味・機能の異なるものでも、同じ項目としてまとめられているものがあつたため、本発表ではそれぞれ意味・機能ごとに分けた。<sup>2</sup>

出題基準に出てくる文法項目のうち、各コーパスでの使用率上位 5% 以上に出現するものを全コーパス合わせると 15 個であった。各コーパスの上位 5% 以上のうち、一番濃い網掛けが上位 10% 以上に出てきたもので、産出・音声では「～として/～としては」、産出・文字では「～について」、理解・文字では「～として」「～ということだ」「～から～にかけて」となっている。その次に濃い網掛けが上位 8% 以上～10% 未満に見られるものである。産出・音声では「～など/なんか/なんて」、「～つけ」、理解・文字では「～べき」、理解・音声では「～について/～については/～についても/～についての」「～として/～としては」「～に対して」、理解・文字では「～ついて」「～によると/よれば」が用いられている。そして網掛けのない「○」が上位 5% 以上～8% 未満である。

## 5. 考察

前節での結果を踏まえ、全体を見てみる。まず、「～について/～については/～についても/～についての」、「～として/～としては」、「～に対して/～に対し/～に対しては/～に対しても/～に対する」はどの場面でも用いられる文法項目として扱えると言える。

- (1) A: じゃあ、今は、どういうのが、ま、はやりのリサーチの、姿勢なんですか。  
B: え、だからその一、何か誰もやってない、細かい問題見つけてそれについてインタビューしたり、(A: なるほどね) ええ、あとはそのもっと複雑な数式使って一、その、統計処理やったりとか。(北九大)
- (2) 7月7日になにがおこるのかを知っていますか。  
知らない人のためにこれから七夕についてお話ししたいと思います。(横浜国大)
- (3) 声明の発表について、韓国外務省のチョ・ジュンヒョク(趙俊赫)報道官は、27日午後、コメントを出しました。(NHK 社会)
- (4) あのことについて言っているのだと葵は気づく。(BCCWJ 文学)

<sup>1</sup> 出題基準のサンプルでは全 170 項目が挙げられているが、本発表では機能別に分類したため、全 180 項目とする。

<sup>2</sup> 出題基準では「～によって/～により/～によっては/～による」と一つにまとめられているが、本発表では「努力によって克服する/憲法により、禁じられている/戦争による被害」の「～によって(原因)」、「人によっては、反対するかもしれない」の「～によって」、「天気予報によると/彼の説明によれば」の「～によると」の 3 つに分けるなど、機能別に分けた項目が 9 つある。



また、ニュースや新聞などメディアでは「～によると/～よれば」、「～一方/～一方で/一方では」「～ことから」「～によって/～により/～による（原因）」がよく用いられていることが明らかとなった。

- (5) ロイター通信などによりますと、ケニアオリンピック委員会は、リオデジャネイロオリンピックの期間中、大会の身分証など選手に必要な物品を提供しなかったということです。(NHK スポーツ)

会話においては、「～など/～なんか/～なんて」は特に「～なんか」「～なんて」の数が多く、砕けた表現として会話中で用いられることがわかった。

- (6) A: ロシア語なんか、話せる人が少ないでしょ。

B: あの、サッカー部の大先輩がやっぱりさー、なんか、ロシア語とったらしくてさー、でー、なんか話せるようになったらもー、そうとういろんなところ行って。(職場編・雑談 男性)

一方、確認するときに用いる「～っけ」、個人的な理由を述べる際に用いる「～もの」(「～もん」も扱った)は会話内でよく耳にするが、やはりこの調査からも会話で用いられやすいことがわかった。

- (7) A: あれ、今おれ印鑑どこやったっけ。

B: どこ持ってたかな。(職場編・雑談 男性)

- (8) A: で、不動産屋さんにはー、元不動産やってたってゆうといやがるからー、いやー、こいつやべーぞ、つつついてくると思うからー。いやー、ぼく不動産<笑いながら>ぜんぜんうとくてー。ほんと、案の定案内してくんないですもん。

(職場編・雑談 男性)

「～おそれがある」などは天気予報で用いられることが多いが、他の場面ではあまり用いられていないようだ。

- (10) 坪木教授は、台風が日本に近づく前から雨が降り続いて大雨になるおそれがあり、早めの備えが必要だと指摘しています。(NHK 気象災害)

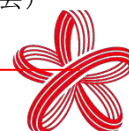
以上のように場面によって使用される項目に違いがあることが明らかとなった。これらを含め、使用場面ごとに分けたものが稿末資料の図 2 である。

## 6. 今後の課題と展望

今回の調査では限られた場面のコーパスでしか調査できなかったため、今後はさらにデータを集めてより実際の生活に密着したものでどの文法項目がよく使われているか調査したい。

また、出題基準の項目にはなくても、「としています」「動詞+など」など、よく用いられるものと考えられるものが今回の調査中いくつか見られた。

- (11) 業界団体は今後、政府や自治体に対して必要な法整備などを求めていきたくしています。(NHK 社会)



(13) 坪木教授は「台風 10 号のようなかなり発達した台風は、湿った空気の流れ込みも強まると考えられ、台風から離れていても注意が必要だ。今のうちに防災マップなどで、大雨の際にはどこへ避難するかを確認するなど早めの備えを進めてほしい」と話しています。(NHK 気象・災害)

このようなものは特定の場面のみ見られるという特徴もある。今後このような調査を他コーパスや場面においても長期的に行いたい。

**参考文献**

庵功雄 (2006) 「教育文法の観点から見た日本語能力試験」『日本語の教育から研究へ』土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会 (編), くろしお出版  
 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2002) 『日本語能力試験 出題基準 [改訂版]』凡人社

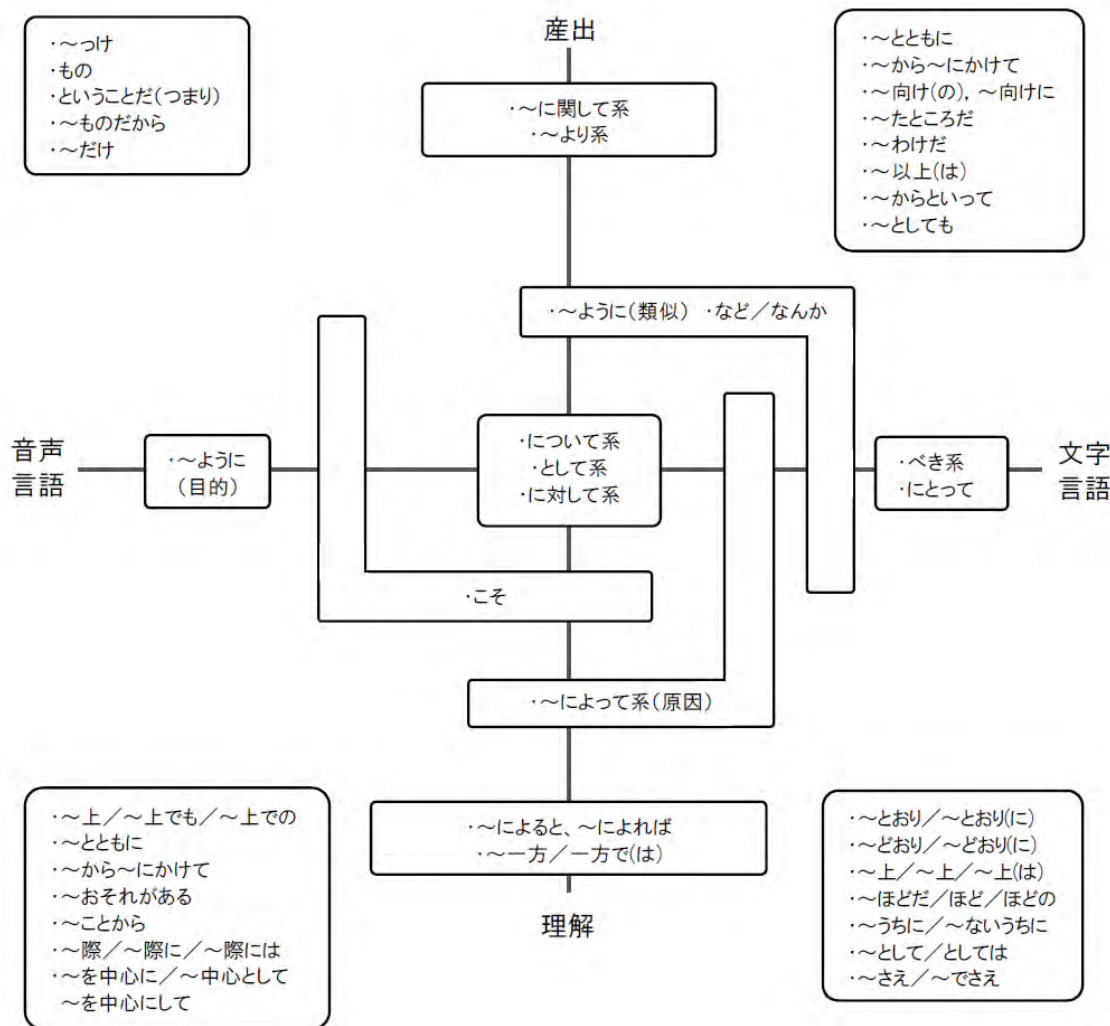


図 2 出題基準の中で出現頻度の高い 39 の文法項目の使用場面





## 意見文における因果関係の表し方

— 「理由先行型」か「結果先行型」か—

美玲 (福岡女子大学大学院生)

### 1. はじめに

近年、大学および大学院で学習・研究活動を行う留学生の増加に伴い、アカデミック・ジャパニーズの観点からの日本語教育の必要性に注目が集まっている。中でもレポートや論文において自分の主張や考えをわかりやすく述べることは大切な技能であり、その実態解明や指導方法の検討は欠かせない。このような研究として、意見文を扱った田代(2007)が挙げられる。田代(2007)は、中国語を母語とした中級日本語学習者(以下、CN)を対象に、日本語母語話者(以下、JP)と比較し、意見文における論理的な表現について分析を行っている。その中で、原因・理由(から・ので等)を表す副詞節について分析した結果、1 作文中の原因・理由の使用平均は、CN と JP との間に有意な差があったが、JP は原因・理由の節だけではなく「～からである」「～のである」等の文末表現を使用して、主張の理由を述べるが多かったことを指摘している。では、ここで指摘されている「～からである」「～のである」は、通常の因果関係を表す接続助詞「～から」「～ので」とどのように違うのだろうか。

このような問題意識に立ち、本発表では、意見文における「因果関係を表す表現」について考察を行う。具体的には、「因果関係を表す際に、理由と結論のどちらを先に述べるか」という観点に注目して調査・分析を行い、「理由先行型」と「結果先行型」の使用について、日本語学習者の傾向が日本語母語話者と明らかに違うということ、また、日本語母語話者が文章中の機能によって「理由先行型」と「結果先行型」を使い分けていることを報告する。

### 2. 調査課題と調査概要

#### 2.1 調査課題

以下に挙げる二つの調査課題を設定する。

【課題Ⅰ】「因果関係を表す表現」について、日本語母語話者と日本語学習者との間に、違いがあるかを明らかにする。理由を先に提示する「理由先行型」と、結果を先に提示する「結果先行型」に注目し、それぞれの使用傾向について比較を行う。

【課題Ⅱ】日本語母語話者の使用傾向を分析する。具体的には、日本語母語話者が「理由先行型」と「結果先行型」を使い分ける際のルールについて明らかにする。

#### 2.2 調査概要

調査に用いた資料：国立国語研究所「日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対



訳データベース」における「煙草についてのあなたの意見」というテーマで書かれた中国語母語話者 34 編，日本語母語話者 43 編の作文。

調査方法：因果関係を表す際に，理由を先に述べてから結果を述べる表現（以下「理由先行型」）「から，ので，ため，のだ<sup>3</sup>，だから」と，結果を先に述べてから理由を述べる表現（以下「結果先行型」）「からだ，ためだ，のだ」の使用数を比較する。以下 (1) が「理由先行型」，(2) が「結果先行型」である。

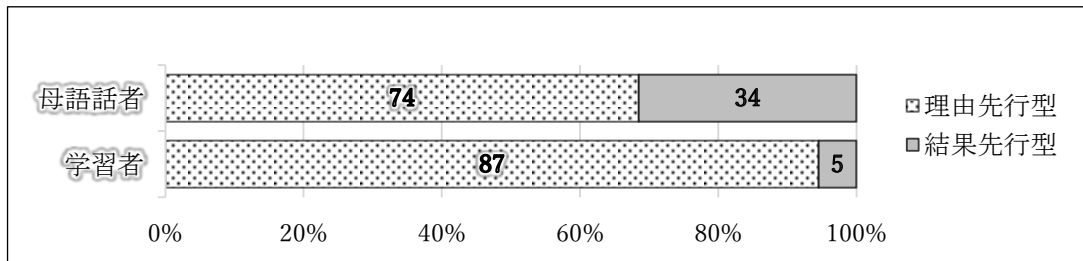
(1) 私は日本語及び日本文化に興味があるから，日本に留学したいです。〔理由先行型〕

(2) 私は日本に留学したいです。なぜなら，日本語及び日本文化に興味があるからです。〔結果先行型〕

### 3. 調査結果

#### 3.1 課題 I について

以下グラフ 1 の通りである。



グラフ 1：母語話者と学習者の使用数の比較(数字は使用数)

グラフ 1 を見ると，日本語母語話者(以下，母語話者)が使用した「因果関係を表す表現」は全部で 108 例あり，そのうち「理由先行型」が 74 例(69%)，「結果先行型」が 34 例(31%) だった。それに対し，中国語学習者(以下，学習者)は全 92 例のうち，「理由先行型」が全体の 90%以上(87 例)を占め，「結果先行型」はわずか 5%(5 例)しか使っていないということが明らかになった。

#### 3.2 課題 II について

課題 I の結果を受けて，母語話者が「理由先行型」と「結果先行型」を使い分ける際のルールについて考察する。本研究では母語話者の「理由先行型」と「結果先行型」の使い分けは，意見文の中での談話機能と関係していると仮定し，分析を行う。論文の組み立て方やその中での文の機能について述べた先行研究として，浜田(他)(1997)が挙げられる。浜田(他)(1997)は，論文を書く際，筆者が言いたい意見(結論)を読み手に納得させるためには，結論の裏付けになる論拠が必要となり，その論拠は「事実(データ)を提示する」部分と，データから導いた「意見を提示する」部分から成ること，また，その論

<sup>3</sup> 「理由先行型」の「のだ」は「日本の政府だってタバコ税などで，喫煙\*者からお金をむしりとりして，国をうるおしている。喫煙\*者も国のために貢献\*しているのだ。」(jp003)のようなもの，結果先行型の「のだ」は「これだけ不都合な事がそろっているのに，なぜ反対かという個人権利というものがあるのです。」(jp047)のようなものである。



拠に基づき、自分が最終的に言いたいことを示す部分が「結論提示」となることを指摘している。

そこで、本発表では、文章における文の機能を、浜田(他)(1997)に基づき、「事実提示」「主張提示」「結論提示」の三つに分類し、分析を行う。浜田(他)(1997)で提示された以下の文章のうち、①③に当たる部分が「事実提示」(下線)、②④に当たる部分が「主張提示」(二重下線)、⑤⑥に当たる部分が「結論提示」(破線)である。

**日本人とコメ**

①最近日本人はコメを食べなくなってきた。②日本人はどうしてコメを食べなくなったのだろうか。

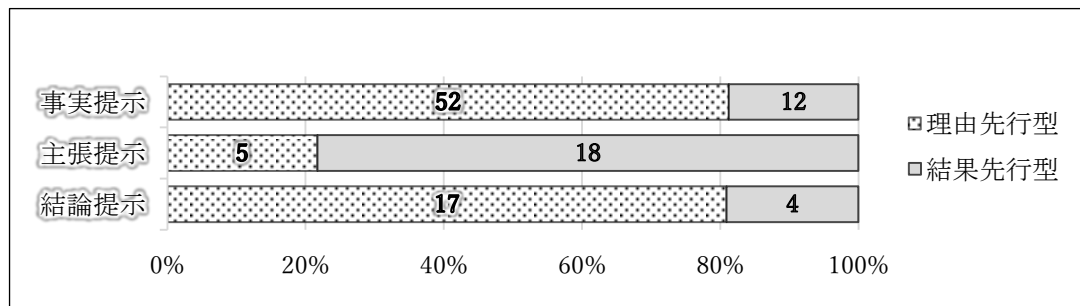
③日本の小学校や中学校には給食というものがあり、子供たちは給食でパンを食べる。④つまり、子どもの時からパンを食べる習慣が身についていることがわかる。

③また、調理時間を考えてみると、コメの平均調理時間は1時間半である。④ここから忙しい日本人は調理時間の長いコメを敬遠するようになったのではないかと考えられる。⑤以上のことから、現代日本人のライフスタイルがコメ食離れを促進させていると言えるのではないだろうか。

⑥このようにライフスタイルの変化によって日本人はコメでなくパンを食べるようになったと言える。

浜田(他)(1997)(番号と下線は発表者による。)

調査結果：調査1で得られた因果関係を表す表現を、浜田(他)(1997)の機能により分類し、それぞれの機能における理由先行型と結果先行型の内訳を示したものが、グラフ2である。



グラフ2：母語話者の因果関係を表す表現の分布(数字は使用数)

グラフ2を見ると、母語話者の「因果関係を表す表現」108例の内訳は、事実提示の部分では「理由先行型」が52例(81%)、主張提示の部分では「結果先行型」が18例(78%)、結論提示の部分では「理由先行型」が17例(77%)を占めていることが分かる。

#### 4. 考察

##### 4.1 「主張提示」に現れる「結果先行型」について

日本語の語順の特徴として、「理由先行型」が一般的であるが、なぜ主張提示のところで



は以下(4)のような「結果先行型」が 8 割近くの高い割合を示しているのだろうか<sup>4</sup>。

- (4) 喫煙を規制すべきか否かに関して、私は規制すべきだと思います。なぜなら喫煙したところで何の利益もなくそれどころか私達の健康に悪影響を与えるだけだからです。  
(jp029)<sup>5</sup>

今尾 (1991) は、(5) のような例を挙げ「前件+後件」という連鎖においては、通例、後件に焦点が置かれることになるのだが、あえて前件を際立たせようとする場合、「文末焦点の原理」を応用して、前件と後件の順序を逆転させることがある」と述べている。

- (5) 会議に遅れてしまったのは、電車の事故があったからだ。 (今尾 1991:83)

また、砂川 (1996) は、情報伝達上重要な情報を先に述べることは、冗長さの最も少ない適切な伝達方式だと指摘している。

従って、(4)は、結論となる最も伝達したい情報「私は規制すべきだと思います」を先に述べることにより、話し手の主張を聞き手に強く印象付ける役割を与える。一方、理由となる情報「喫煙したところで何の利益もなくそれどころか私達の健康に悪影響を与えるだけだ」を後に述べ、理由に焦点を与えることにより、読み手に伝達する命題内容（結論）を納得させる機能を果たしていると考えられる。以上の理由から、意見文の最も重要な部分である主張提示のところでは「結果先行型」が高い頻度で用いられているのではないかと考えられる。

## 4.2 「事実提示」と「結論提示」に現れている「結果先行型」の少数例についての解釈

### 4.2.1 「事実提示」に現われている「結果先行型」12 例について

「事実提示」の部分は 52 例 (81%) が「理由先行型」であるが、「結果先行型」も 12 例使用されている。この 12 例のうち、11 例で「からだ。」が使用されている。中でも (6) に挙げたような理由が複数述べられる場合が多い。

- (6) 私は喫煙規制に賛成である。公共の場所での喫煙は法律で規制すべきである。それにはいくつか理由がある。まず第一に、たばこを吸わない人もたばこを吸う人と同じ部屋にいると同じくらい煙を吸いこんでいるため、吸っていなくても身体に悪影響を及ぼしているからである。〔中略〕第二に火事の危険性がある。〔中略〕そして第三に、歩きたばこをする人がいるということである。 (jp048)

理由が複数ある場合、理由先行型で述べることは文の冗長さや読みにくさにつながる。そこで、箇条書きのようなかたちでまとめて後から示す表現、つまり「結果先行型」が選択されるのだと考えられる。

### 4.2.2 「結論提示」に現れている「結果先行型」の 4 例について

<sup>4</sup> 以下、例文では、理由を示す部分を下線で、結果を示す部分を波線で示す。

<sup>5</sup> 「jp」は日本語母語話者を示し、「029」は受験者の番号を示す。



「結論提示」の部分は 21 例のうち 17 例が「理由先行型」であるが、「結果先行型」も 4 例使用されている。この中には、(7)のように、文章全体の結論のところ、それまでに述べた主張をもう一度繰り返す際に、「結果先行型」を用いている例がある。

(7) 私は規制に賛成である。〔中略〕私が規制に賛成なのは、喫煙者全員が以上のような自覚を持つことは絶対にあり得ないからである。 (jp045)

## 5. まとめ

### 5.1 本研究の主張

【課題Ⅰ】について：意見文において、母語話者は「理由先行型」と「結果先行型」を使い分けしているのに対し、学習者は主に「理由先行型」を用いている。従って、母語話者と学習者とで、「理由先行型」と「結果先行型」の使用傾向に違いがあるという、ことが明らかになった。

【課題Ⅱ】について：日本語の語順の特徴としては、「理由先行型」が一般的であるが、意見文においては、以下のように「結果先行型」との使い分けのルールがあることが明らかになった。

1) 主張提示の部分では「結果先行型」が高い頻度で用いられる。

これは、結論となる最も伝達したい情報を先に述べることにより、話し手の主張を聞き手に強く印象付ける役割を与え、一方で、理由となる情報を後に述べ、理由に焦点を与えることにより、読み手に伝達する命題内容（結論）を納得させる機能を果たすためだと考えられる。

2) 事実提示と結論提示の部分では、主に「理由先行型」が用いられる。ただし、主張の根拠になる理由がいくつかある場合や、結論のところ、主張を繰り返す場合は、「結果先行型」を用いることもある。

### 5.2 今後の課題

本発表では、母語話者が、文章中の機能によって「理由先行型」と「結果先行型」を使い分けしていることを明らかにした。本発表では触れていないが、学習者の因果関係を表す表現の 92 例を母語話者の分析方法と同様に「事実提示」「主張提示」「結論提示」のどれに当てはまるかを調査した結果、主に「事実提示」の部分で母語話者と異なり「結果先行型」が高い割合で現れているということが既に明らかとなっている。今後はその理由について、学習者の母語の影響も視野に入れより一層考察を深めていきたい。

#### 参考文献：

今尾ゆき子(1991)「カラ、ノデ、タメーその選択条件をめぐって」『日本語学』第 10 巻 第 12 号, pp. 78-89

砂川有里子(1996)「日本語コピュラ文の談話機能と語順の原理 —「A が B だ」と「A のが B だ」構文をめぐって—」『文藝言語研究 言語篇』第 30 巻, pp. 53-71 筑波大学文芸・言語学系



- 田代ひとみ(2007)「中級日本語学習者の意見文における論理的表現」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』14, pp.131-144
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子(1997)『大学生・留学生のための論文ワークブック』くろしお出版



〔ポスター発表③〕

## スマートフォンを活用した活動型学習の可能性

—街歩きクイズラリーを通じた交流の一考察—

高尾まり子・寺嶋弘道・戸坂弥寿美・井上佳子

(立命館アジア太平洋大学)

### 1. 研究背景

近年、日本国内の大学では英語で履修が可能なコースや科目を設置する動きが見られる。2013 年には英語の授業のみで卒業できる学部は 19 大学 38 学部に達し、5 年前の約 5 倍となっている（文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室 2015）。このように、日本語での科目履修を想定せず、日本語の学習経験がない正規留学生（以下:留学生）を積極的に受け入れるという変化は、これまでの大学における日本語教育を新たに捉え直す機会となっている（小山他 2012）。一般的に上述のコースの多くは異文化を理解し、国際的な視点を備えた人材を育成することを目標の一つとしているが、そうしたコースであれば、留学生が日本語の学習過程で地域の人々と関わりを持つことはさらに重要となるだろう。そのような関わりは留学生と母語話者の共生を促進するという点においても意義のあることである。

従来より、日本語教育ではインターアクション能力の養成という観点から、授業で母語話者と接触する機会が提供されてきた（中井 2012）。さらに、近年では「社会と関わることをめざす日本語教育」（西俣他 2016）が提唱されており、日本語学習者（以下:学習者）と地域社会との関わりを考えた授業の実践は今後より重要な課題となるだろう。

### 2. 立命館アジア太平洋大学での取り組み

2000 年に開学した立命館アジア太平洋大学（以下:APU）でも日本語学習経験がない留学生を受け入れており、2016 年 11 月現在、約 2700 名が在籍している。入学後、留学生は日常生活に必要な日本語を習得するため、日本語初級から中級までを必修として学び、最初の一年は日本人学生も住む寮で生活する。開学当初、留学生の中には、APU が日本の大学だからではなく、国際大学であるという理由で留学を決めた者が多く、日本や日本文化に関心を持つ者ばかりだったわけではないという（本田 2013）。そうした背景から、APU では地域母語話者とのビジターセッションが開始され、現在では地域の母語話者への街頭インタビューも取り入れられている（本田 2013, 戸坂他 2016）。

### 3. 先行研究

中井（2012）は授業活動を整理するため、村岡（2003）の研究を踏まえ、アクティビティを「日常生活において母語話者や非母語話者が参加する活動」とし、言語的アクティビティと実質的アクティビティの関係と区分を捉え直している。前者は雑談や相談といった



社会言語行動を行うこと、後者は観光やキャンパス体験といった社会文化行動(実質行動)を行うことを目的としたものであるという。さらに、中井(2012)はマトリックス図を用いて、言語的アクティビティと実質的アクティビティを扱った授業活動をそれぞれ4つの領域に分類している。この図は「実際使用-練習」という縦軸と「計画性-即興性」という横軸が交差するもので、2つの軸を基に授業をデザインすることで授業活動のバリエーションが広がり、総合的なインターアクション能力を育成することが可能だという。

総合的な日本語力を養う APU の日本語中級コースでは、これまで言語的アクティビティとしてビジターセッション(寺嶋他 2013, 井上他 2014), 学外での母語話者との交流会(井上他 2016), 言語的・実質的アクティビティとして母語話者への街頭インタビュー活動(戸坂他 2016)を実施してきた。それらの授業活動を中井(2012)のマトリックス図に従いプロットすると、図1のようになる。この図を見ると、これまでの APU の日本語中級コースでは、「インターアクションの本番性」、「学習者や会話相手の管理」、「即興性」が強い実際使用の実質的アクティビティに関しては提供できていないことが分かり、これらを補う新たな活動型学習についても検討していく必要がある。

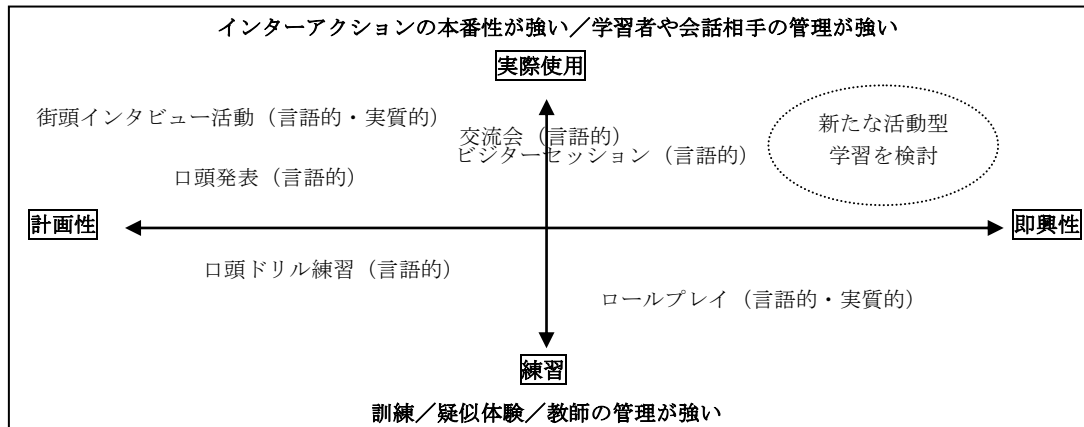


図1 APU の日本語中級コースにおける授業活動の分類

これまでの先行研究では、APU での活動型学習の実態も明らかになっている。まず、APU の初級から上級までの学習者 384 名のうち、92%はビジターセッションを希望しているという(井上他 2014)。しかし、この活動が地域の母語話者に良い印象を持つきっかけとなっているものの、地域の母語話者と交流したいという意欲にはつながっていないことも示唆されている(寺嶋他 2013)。また、互いが知りたいことを学び合う交流を期待していることも報告されている(井上他 2014)。街頭インタビュー活動に関する調査では、国際交流に関心が高い母語話者はこの活動が双方にとっての異文化交流の機会と捉えているが、関心が低い母語話者は学習者のメリットのみに言及し、この活動を双方が学ぶ場とは捉えていなかったと報告されている(板橋他 2014)。さらに、交流会では、母語話者との友人関係の構築を期待した学習者もいたが、友人関係に発展させることができなかったという(井上他 2016)。

以上を踏まえ、新たな活動型学習を提案するのであれば、単に学習者と母語話者との交流の場を提供するだけでなく、両者をどうつなぐかという質的な面からも検討する必要があるだろう。





#### 4. 研究目的

本研究では、留学生と母語話者をつなぐ新たな実質的アクティビティとして、スマートフォンアプリ「まちクエスト」を用いた交流イベントの実施を試み、授業における活動型学習の可能性を検証した。「まちクエスト」とは、スマートフォン用の無料アプリで、GPS機能を用いて街歩きをしながら、街の中に隠されたクイズを探し、問題を解くものである。このアプリではクイズへの解答及び作成が可能で、クイズラリーを設定することもできる。

近年、街歩きは日頃見落としがちな街の魅力を再発見する方法として有効とされている。APUがある別府市は、共同湯や路地などの生活空間をめぐる街歩きが有名で（東京都市長会 2015）、留学生と母語話者の双方にとって地域文化の理解につながる魅力的なものだと考えた。また、実質的アクティビティであるクイズラリーに留学生と母語話者が協働で取り組むことで、両者の交流や関係構築が促進できると期待した。

#### 5. 交流イベントについて

交流イベントは 2016 年 11 月の土曜日に別府駅周辺で実施した。クイズラリー（以下：ラリー）を 3 時間、その後、1 時間を茶話会とした。参加者は SNS やポスター等で募集し、当日は留学生（以下：IS）6 名、母語話者（以下：NS）11 名が参加した。NS のうち、4 名は子供であった。参加者には事前に、国籍や年齢、性別、外国語能力、参加理由について聞き、当日はそれらのバランスに配慮し、表 1 のようなグループを作った。

表 1 各グループの構成

グループ 1	グループ 2	グループ 3	グループ 4	グループ 5
マレーシア人 (女性) NS (男性) (女性)	ベトナム人 (女性) NS (女性) (女性)	ベトナム人 (男性) (女性) NS (男性)	ネパール人 (男性) NS (女性) (男児) (女児)	ベトナム人 (女性) NS (女性) (男児) (女児)

クイズの出題言語は参加者のインターアクションが活発になるよう、日本語、英語、日英両言語のいずれかで作成した。問題は歴史、温泉、名物、防災、生活といった視点から 50 問作り、ラリーとして公開した。ラリーを盛り上げるため、また、数を競うだけにならないよう、クイズの中から選定した 9 つの問題で 3×3 のビンゴを作成し、景品を準備した。

#### 6. 研究方法

参加者にはイベントの最後に質問紙で交流や街歩き等に関する感想を聞き、承諾が得られた参加者に後日、半構造化の形式でフォローアップインタビューを行った。質問紙の回答者は 13 名 (IS6 名, NS7 名)、インタビューの協力者は 5 名 (IS2 名, NS3 名) であった。

#### 7. 結果と考察

##### 7-1. 各グループの正解数と移動範囲

表 2 は各グループがどの程度、ラリーでクイズに正解できたかを示し、図 2 は特徴的な動きをした 3 つのグループの移動範囲を地図で表したものである。

表 2 からはグループによって正解数、ビンゴの完成数が大きく異なっていることがわかり、図 2 からはそれぞれのグループの移動範囲が異なっていたことがわかる。



表 2 ラリーの結果

グループ	正解数	ビンゴ
G1	13/50	全列
G2	20/50	全列
G3	32/50	全列
G4	26/50	2 列
G5	13/50	0 列

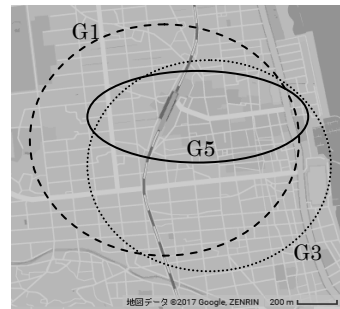


図 2 グループの移動範囲

### 7-2. 質問紙調査の分析

図 3 は質問紙調査の結果である。この結果から、まず IS も NS もこのイベントを楽しんだことが分かる。また、参加者はラリー中、互いに協力し、クイズ以外のことを多く話していたようである。図には示していないが、半数が連絡先の交換をしており、イベント後も両者の関係が継続することが期待された。「外国語で話す自信を得た」という項目については、13 名中 NS5 名が否定的な回答をした。7-3.でも述べるが、G1 以外は、ほとんど日本語を使用していたようである。NS の中には、英語での交流を期待していた者もあり、その期待とは異なったようである。また、今回のイベントでは、別府の町を見直し、興味が湧く場所を見つける機会にもなったようである。

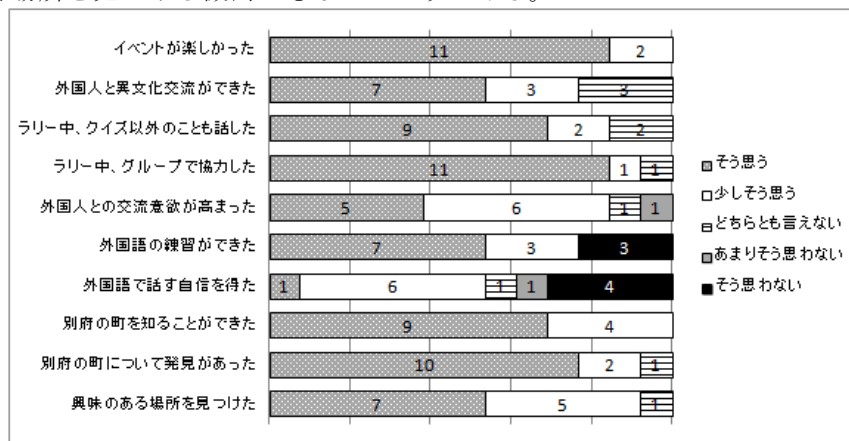


図 3 質問紙調査の結果

### 7-3. フォローアップインタビューの分析

表 3 はフォローアップインタビューの結果をまとめたものである。フォローアップインタビューの結果から、まず、このイベントが楽しかった理由は、グループメンバーと親しくなったこと (G1:NS)、普段歩かない路地裏を歩いたこと (G2:IS)、相手の国のことを聞いたこと (G2:NS)、知っている町を歩きながら非日常的な体験ができたこと (G3:IS)、別府について深く知れたこと (G3:NS) だとわかった。ラリー中は、互いに関心があること (G3:IS) や国のこと (G2:IS, NS) について話したようであった。特に G1 はビンゴのみに集中することで時間を作り、喫茶店で落ち着いて交流ができたようである (G1:NS)。

言語の使用についてはグループによって違いが見られた。G1 の NS は 2 人とも質問紙で外国語の練習ができたと評価していたが、インタビューから会話の 9 割が英語であったことがわかった (G1:NS)。一方、G2 では IS の日本語が流暢であったことから、日本語でのや



り取りが中心で (G2:NS, IS), 英語の練習はできなかつたようだ (G2:NS)。今回のイベントでは、インタビューの協力者全員が普段行かない場所へ行けたことや街を歩かなければ知りえない情報を得たことが良かったと評価している。

表 3 フォローアップインタビューのまとめ

G1 NS	別府は英語を話すチャンスが多い街だと思う。ラリー中 9 割は英語でコミュニケーションを取った。英語でのやり取りは大変だったが、最終的に親しくなれ楽しかった。駅周辺は生活エリアだが、今回のイベントで普段行かないような場所に行けたことが良かった。ビンゴを完成させることに狙いを定め、途中、喫茶店でのおんびり交流を図った。後日、その時のメンバーを自身が主催するイベントに誘った。
G2 IS	日本語が中心だったが、ほとんど理解できた。少人数で行動できたことが良かった。路地裏を歩いたことが最も楽しかった。駅周辺は生活エリアで良く歩くが、路地裏アートを見たのは初めてで興味深かった。別府は歩いて面白いものを探すとできると分かった。和菓子屋の店員と接し、また行きたいと思った。ラリー中は互いの出身地の話などをし、SNS の連絡先を交換したが、現在のところ交流は続いている。
G2 NS	英会話を習っており、国際交流に興味があった。また、街歩きにも興味があった。IS の日本語が上手だったため主に日本語を使用し、英語があまり使用できなかった。IS に対して分かりやすい日本語で話そうと意識した。IS の出身国の話が最も楽しかった。正解数を上げることとビンゴを完成させることのどちらに集中すべきか迷った。その場所に行かなければわからない情報が得られた。好意的な店員との会話も印象的だった。
G3 IS	知っている街を歩きながらクイズを解くのが非日常的で楽しかった。日本語の練習を期待し、9 割は日本語で話した。NS が日本語をコントロールしているとは感じなかった。ゲームのことや個人的な話を話した。古い街並みが保存されていることに改めて気付いた。細い路地にあるアーティストの作品が印象的だった。SNS の連絡先を交換した。
G3 NS	参加を決めていた友人から誘われた。ゲームが好きで、「まちクエスト」に興味があった。英語については仕事やプライベートで使う機会があり、期待していなかった。グループではできるだけ簡単な日本語で話した。別府の歴史に触れられたことが楽しかった。普段 SNS で別府に関する情報交換をするが、それでは得られない情報を知る機会となった。

## 8. 活動型学習としての可能性

以上、本研究では「まちクエスト」を用いた交流イベントの実施を試み、その結果を分析した。各グループはイベント中、様々な事について話しながら、互いの協力のもとでラリーを進め、インターアクションの本番性、即興性の強い実質的アクティビティを行っていた。こうした点から、「まちクエスト」は、これまでの活動型学習において不足していた点を補えるものと言える。今回 NS は、外国語学習の面ではメリットをあまり感じていなかったが、国際交流の機会や街を知るといったイベントを魅力的なものと感じていた。そうした魅力は様々な NS の参加を促す要因になると考えられる。一方、IS にとっては、街を知るだけでなく日本語学習の機会になるというメリットがあり、母語話者との交流意欲も高まっていた。本研究で試みた交流イベントは、以上の特徴を有した活動型学習になりうることを示唆された。

一方、注意すべき点としては、ラリー中は教師の管理が弱く、言語面で支援ができず、安全面においても目が届かないため、配慮が必要である。したがって、あらかじめ外国人との接し方の説明、安全面での注意喚起が必要である。また、教室外では予想もしないことが起こることにも留意しておく必要がある。今回は当日のキャンセルによって、グループを変更する必要があった。さらに、周囲のイベントによる騒音で、開始前に本イベントに関する説明が十分にできないという問題や、クイズ作成時と状況が変わったことでクイズの解答が見つけられないという問題も起こった。

今後は以上の点を踏まえ、APU の日本語中級コースでの導入方法を検討していきたい。



追記：本研究は科学研究費基盤研究(C)26370623 「『街を教室にする』プロジェクトー社会参加をめざす日本語教育における教員の役割」（代表：本田明子）の研究成果の一部である。

#### 参考文献

- (1) 板橋民子・松井一美・吉里さち子（2014）「地域住民へのインタビュー活動に対する母語話者の評価ーフォローアップインタビューの SCAT 分析よりー」『2014 年度第 6 回日本語教育学会 関西地区研究集会 発表要旨』
- (2) 井上佳子・高尾まり子・寺嶋弘道・戸坂弥寿美（2014）「ビジターセッションに対する学習者の意識ーより効果的なビジターセッションの運営に向けてー」『ポリグロシア』第 26 巻, pp.105-120
- (3) 井上佳子・寺嶋弘道・戸坂弥寿美・高尾まり子（2016）「『街を教室にする』プロジェクト：学習者の母語話者とのつながりを生かした活動型学習とその考察」2016 年日本語教育国際研究大会
- (4) 小山悟・菊池富美子（2012）「学士課程国際コースの日本語教育ー大学の日本語教育はどうあるべきかー」『ウェブマガジン「留学交流」』2012 年 10 月号, Vol.19, pp.1-8  
[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2012/\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/19/koyamasatoru\\_kikuchifumiko.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2012/_icsFiles/afieldfile/2015/11/19/koyamasatoru_kikuchifumiko.pdf)（2017 年 3 月 25 日）
- (5) 寺嶋弘道・板橋民子・佐々木美江・戸坂弥寿美（2013）「中級におけるビジターセッションの意義と問題点ー立命館アジア太平洋大学のケースー」『ポリグロシア』第 24 巻, pp.224-234
- (6) 東京都市長会（2015）「多摩地域における『まち歩き』のすすめー歩いて見つけよう、感じよう わがまちの魅力ー（平成 27 年 2 月）」  
<http://www.tokyo-mayors.jp/katsudo/pdf/tamamachiaruki2015.pdf>（2017 年 3 月 25 日）
- (7) 戸坂弥寿美・寺嶋弘道・井上佳子・高尾まり子（2016）「学外での日本語母語話者へのインタビュー活動に関するー考察ー学習者の不安とその変化を中心にー」『日本語教育』第 164 号, pp.79-92
- (8) 中井陽子（2012）『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』シリーズ言語学と言語教育 25 ひつじ書房
- (9) 西俣（深井）美由紀・熊谷由理・佐藤慎司・此枝恵子（2016）『日本語で社会とつながろう！社会参加をめざす日本語教育の活動集』ココ出版
- (10) 本田明子（2013）「学習者と母語話者のインターアクションによる日本語学習の可能性ー立命館アジア太平洋大学における地域交流授業の実践からー」『立命館言語文化研究』24（3）, pp.131-141
- (11) 村岡英裕（2003）「アクティビティと学習者の参加ー接触場面にもとづく日本語教育アプローチのためにー」宮崎里司／ヘレン・マリオット（編）『接触場面と日本語教育ニューストプニーのインパクト』明治書院 pp.245-259
- (12) 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室（2015）「大学における教育内容等の改革状況について（平成 25 年度）」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1361916.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1361916.htm)（2017 年 3 月 25 日）



**公益社団法人日本語教育学会**

**支部活動委員会**

委員長：衣川隆生

副委員長 小河原義朗・中島祥子

委員：和泉元千春・奥村圭子

桑原陽子・高橋亜紀子・高橋志野

永田良太・西村学

**支部活動運営協力員**

**【九州・沖縄支部】**

金森由美・坂井美恵子・本田明子・

山元淑乃・吉川達

**審査・運営協力員**

秋元美晴・大島弥生・大場美和子

御館久里恵・落合由治・何志明

神村初美・川口直巳・川村よし子

菊岡由夏・小池亜子・小林明子

小森由里・齋藤伸子・佐藤慎司

田中祐輔・ダニエル ロング

谷口龍子・因京子・鄭惠先

坪根由香里・中河和子・永谷直子

野田春美・服部明子・坂野永理

深澤のぞみ・古本裕美・本田明子

本田弘之・前田均・松下達彦

水野晴美・三代純平・六川雅彦

森本郁代・柳田直美・築島史恵

由井紀久子・横山紀子・脇田里子

**公益社団法人日本語教育学会**

**2017年度第1回支部集会【九州・沖縄支部】予稿集**

---

発行 2017年5月1日

発行者 公益社団法人日本語教育学会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会新館 2F

TEL 03-3262-4291 FAX 03-5216-7552 E-mail office@nkg.or.jp

URL <http://www.nkg.or.jp>



公益社団法人

日本語教育学会

---